

被災者の生活	94
救援	98
消防活動	102
行政の対応	105
企業活動への影響	108
建築界の対応	110
交通網の復旧	112
ライフライン (非情報系)	114
ライフライン (情報系)	116
人工島	118
危険物	120
その時、私は	122

被災者の生活

21万人が“わが家”を求めて

奇妙に静まりかえる町

1995 (H7)

1月17日午前5時46分。冬の遅い夜明けを前に、まだ闇につつまれた街を突然襲った突き上げるような揺れは、戦争時の空襲と間違えた人もいたほどの激しさだった。

「おーい、生きとかあ。」

床にたたきつけられたり転がったり、立ってられないほどの揺れがようやく収まった時、人々は暗闇の中でまず家族の名前を呼び合い、安否を確かめ合った。幸いにも命があった人々は、「とにかく外へ」と、ガレキの中を手を取り合ってなんとかはい出した。その時、多くの人は、街が妙に静まりかえっているのを感じた。

どこか避難場所を、と探しながら歩く道は亀裂やひずみでどこほこで、真つすぐ歩くのすら難しいほど。そこかしこに崩れ落ちた家屋のガレキがめちゃくちゃに散乱している。土砂の下から生き埋めになった人々の苦しそうなうめき声が聞こえて来る。

辺り一帯には火災のきな臭いにおいがたちこめ、風に乗って火の粉が飛んでくる状態では自分の身を守るのがせいっぱいだ。その朝、人々が、自分たちがいかなる大惨事に見舞われたかを理解するまでに、たいした時間はかからなかった。

天井が怖い！

「天井が怖いよう！」。避難所の体

育館にどうしても入ろうとせずに泣きじゃくる幼い子供。その横でグラウンドに呆然としゃがみこむ20代前半の母親は、零下2.5度の寒空の下でパジャマだけしか着ておらず、足ははだしのままだ。グラウンドに続々と集まってくる他の人々の中には時おり毛布を手に入れている人もいるが、ほとんど布団から飛び出したままの着のみ着のままの姿だ。ケガ人や虫の息の人々をのせた担架代わりの戸板やたんすの引き出しが、うづくまる人々の間を次々に通り抜ける。毛布ですっぽりくるまれた遺体らしいものの数がどんどん増えていくのが、被害の大きさを物語る。

情報の断絶、ラジオだけが頼り

この修羅のさなか、人々がガレキの下をくぐり抜け、まず本能的に目指したのは、落ちてくる天井のない開かれた空き地だった。次にくる余震のことを考えると、屋内はあまりにも危険に思われた。

夜もすっかり明けた7時過ぎになると、避難所と化した公園や学校の校庭は人々でびっしり埋まり、9時頃になるとあちこちにブルーのビニールシートが敷かれ、ぼつりぼつりとテントも張られ始めた。

「すまんなあ、もうなあーんにもあらへんのやわ。」

地震発生後30分ほどたった6時過ぎから早くも開いているコンビニや公衆電話には長い列ができた。懐

●避難先の住居の変化

〈地震当日〉

家の近くの空き地やグラウンドにビニールシートを敷いたり、テントを張る体育館や市役所のロビーに毛布を敷く。車内で一夜を明かす人もいた

〈2日目〉朝の最低気温零下2度

自衛隊のテントが到着。野営をしていた人々の一部が移るフェリー2隻が西宮市鳴尾浜に接岸、緊急の避難所に

〈4日目〉

淡路島の津名町に常石造船の観光客船が接岸、避難所に避難所に仮設トイレが据えられ始める

〈6日目〉雨が降る

戸外にいた人々が屋内に集まってきたため、避難所内はすし詰め

〈1週間目〜〉

1/24、この日1カ月間で最も多い30万7000人が避難所に避難所に仮設風呂が設置されるようになる

〈2週間目〜〉

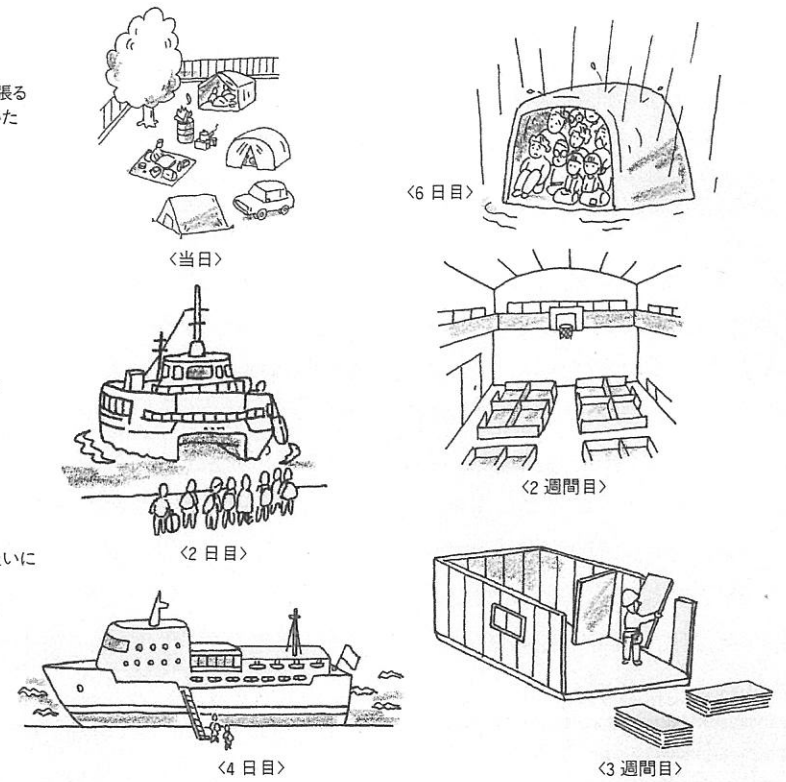
1/31、厚生省がホテルや旅館、アパートなどを借り上げ、仮設住宅扱いにプライバシー保持が問題化。再び戸外で暮らす人も出始める
2/1、インテックス大阪会場内に間仕切り付きの仮設避難所ができる

〈3週間目〜〉

2/2、淡路島で仮設住宅入居始まる
2/6、宝塚市と伊丹市で仮設住宅入居始まる

〈〜1カ月目〉

2/15、神戸市の仮設住宅の一部入居始まる
西宮市立中央体育館には、まだ750人の避難者



中電灯や電池、それに水やパン、おにぎり、カップ麺などのすぐ食べられる食料品はあっという間に売り切れた。停電のため、バーコードのレジが使えず、店主は金額を思い出しながら一件ずつ手作業で計算する。レジの前のあまりの列の長さに業をにやした客が、「ここに、お金多めに置いとくわなあ」とレジ台に現金を置いていくが、それを確かめる暇もない。

人間だから喉も乾くし、お腹はすく、トイレにも行きたくなり、混乱の中で次から次へと対処すべきことが出て来る。が、いったい何が起きたのか。どのくらいの被害が出ているのか。これからどうしたらいいのか。あらゆる情報ルートを断たれた被災地の人々は陸の孤島に閉じ込められた状態にあった。行政からは何

の連絡もなく、電話は通じない。テレビは停電でだめ、電車や道路も寸断された。これまであふれるような情報量の中で生活を送っていた人々にとって、こうした情報断絶の不安は思いのほか大きかった。

そんな中で唯一の情報源はラジオ。人々はむさぼりつくようにラジオの情報に耳を傾けた。

空腹、ひとりパン1個の夕食

「朝から何も口にしてへん」。これほど大きな地震があるとは全く想定していなかった各自自治体で備蓄していた食料はあまりにわずかだった。計77カ所の避難所に市民1万5000人が避難していた宝塚市では、飲料水の備蓄はゼロ。食料は乾パン250缶、インスタント赤飯が50食

というありさま。各地からの救援物資の到着を待つしかなかった。

暖房もなく、冷たい板貼りの体育館で毛布にくるまってひたすら耐える人々に初めての給水が始まったのが、地震発生から半日もたった午後5時頃。さらに待ちに待った救援の食料が届いたのは、日もすっかり暮れた後だった。

避難所によっては交通の寸断と混乱による渋滞、救援物資を仕分けして配る市の職員の人手が足りないため配給が大幅に遅れ、ようやく食料が人々の手に渡ったのは、幼い子供たちが既に疲れ果てて眠りについた深夜となった。しかも配給はひとり菓子パン1個に缶入りのお茶が1家族に1個。届いたおにぎりの数が足りず、半数の人々が何も口にできなかった避難所もあった。

余震におびえた最初の夜

停電のため、日が暮れた後は避難所の中も真っ暗で、懐中電灯とろうそくの灯りだけが頼りだ。人々の話声でざわめく暗闇の中から乳飲み子の泣き声が響くが、母親にはミルクを溶く水もない。「赤ん坊いるんで、明日はなんとか家内だけでも大阪の実家にやりますわ」。周りに気がねして廊下に出て赤ん坊をあやす父親が疲れきった表情で言う。館内は満員の雑魚寝状態で、そこをかき分けてトイレに行くのも気がねだ。トイレは断水しているため、昼間から既にあふれている状態だ。

夜になると、とりあえず体育館の中に寝床を求める人々と、余震の不安から外に駐車した車やテント（中には校庭のサッカーゴールや藤棚にビニールシートをかけた即席テントも登場した）で夜を明かす人々とに分かれた。避難所によっては深夜になっても毛布が一枚も来ないところもあったが、「ぎょうさん亡くなった人いるのに、命助かっただけでもありがたい」とつぶやく老婆の声が耳に残った。

この日朝から、亡くなった妻と上の子供の遺体を収容する棺探しと両親に連絡するための電話探しに一日中駆けずり回り、夜遅くになってようやく近所の人に預けておいた幼い下の子供を避難所に引き取りに来た男性は、「お腹がすいた」という子供を抱き上げ、さて今晚どうしよう

か妻に相談しようと考えた。そして、その時初めて妻の死という事実直面し、号泣したのだった……。

非情にもこの冬一番の冷え込みで気温が零度以下に下がった夜、18万7000人の人々が、凍てつく寒さに震え、余震の不安におびえながら、避難所での最初の夜を明かすことになった。

3日目/「地震疎開」始まる

地震発生直後から各地で多発し、燃え続ける火災のため、3日目の19日になると避難所で暮らす人々の数は27万5000人に上った。どの避難所も足の踏み場もないほどの混雑で、断水、トイレ不足、寒さ、水・食料不足に加え、蔓延しつつあるインフルエンザの流行など、そこでの生活環境は劣悪だった。

こうした被災地での状態から脱するため、「地震疎開」する人々も出てきた。その影響で、阪神を結ぶ国道2号線など幹線道路はこの日の朝から大きな荷物を積んだ乗用車やタクシーで全く動きが取れないほどの大渋滞となり、電車が動いている駅まで大きな荷物を背負って何キロも長い道のりを黙々と歩く人々の列が続いた。

一方、被災地に残った人々も、ほとんど無我夢中で生き延びることだけでせいっぱいだった2日間を経て、長期化する見込みの避難生活をどう過ごしていくかを考え始めた。

避難所によっては内部で自発的に自治が形成されたり、ボランティア達の活動によって混乱の中に少しずつ秩序がもたらされ始めたのもこの頃からだった。

一部ではボランティアによる炊出しが始まって暖かい食事が提供された所もあったが、まだ多くの避難所では三食ともパン1個と1パックの牛乳だけなど十分にはほど遠いものだった。指定された避難所外では、区が水や食料を配給していることを知らない人もまだ数多くいた。

無情の雨、再び避難。

そして、地震発生から6日目の22日、被災地に雨が降った。土砂崩れなど二次災害の恐れで再避難勧告が出た地域や、空き地やグラウンドなどで野営していた人々が避難所に急ぎょ押し寄せて再避難してきた。そのため、屋内では収容しきれずにグラウンドなどにテントを張って対応したが、ひとつのテントに数家族が20人も暮らすなどというケースも出た。

避難者数がピークだった23日には、兵庫県内1239カ所の避難所でおよそ32万人もの人々が、膝を詰めあい肩を寄せあうようにして暮らしていた。

食料事情は思うように改善されず、冷たいおにぎりやパンなどの簡便食に飽きた人々からは、「何かあたたかいものが食べたい」、「野菜不足で子供が体調を崩してしまて……」と

不満の声があがり始めていた。が、住民に十分な栄養補給がなされるようになるには、さらに2週間以上も待たなければならない。

1週間目/立ち上がり始める人々

地震発生から丸1週間目の24日、避難所では相変わらず、暖房が少なく寒さに震え、食料事情の悪さも加わり風邪をひく人も多く、疲労の色が濃くなり始めた。また、慣れぬ避難所生活で「眠れない」と不眠やストレスによる精神不安定を訴える人も多く、精神医療の必要性が出てきた。25日には西宮市の保健所が京都府保健環境部の協力により、精神医療救護所を設け、住民たちの相談を受け付け始めた。

一方、26日には阪神電鉄本線が9日ぶりに神戸と大阪をつなぎ、避難所から朝、背広とネクタイに着替えて会社に通勤し始める人々も現れた。また、とりあえずできることから商売を始めようと、つぶれた店の前で露店を開いて商品を並べたり、メニューを限定してオープンするレストランが現れたり、少しずつ復旧への動きが活発になってきた。

2週間後/「プライバシーあらへん」

被災から2週間近くたつと、避難所では自宅の全壊をまぬがれた人々の間では、昼間は自宅に戻って暮し、夜だけは避難所で寝るというパター

ンの暮しをする人々が増えてきた。

その一方で、帰る家もなく、身を寄せるあてもない人々も多い。避難所生活が長期化の兆しを見せるに従って目立ってきた住民たちの不満は、避難所の共同生活における「プライバシーのなさ」であった。

被災当初の、とにかく命が助かっただけで、暖かい毛布と雨露しのげる寝場所があるだけ、飲む水・食べるものがあるだけで十分の初期段階から、被災住民たちの状態は次の段階に入った。

「うちに送ってきたものをリーダーの人が勝手にみんなに分けてしまう」と、みけんにしわを寄せていらだちが隠せない20代の主婦。

「出かけているうちに、誰かがうちの毛布持ってってしまた」。館内のあちこちを見回りながら途方に暮れた様子の老女。

「何回注意しても隣のおじさんが煙草を吸うのをやめてくれない」とふくれる女子高生。

避難所生活は、体育館などの大部屋に、仕切りも何もないままに数十人から数百人もの人々が、それぞれ毛布一枚がせいぜいのスペースで暮らすという、個室生活に慣れた都市住民たちには慣れない共同生活である。被災当初のお互いいたわりあい、譲り合うような気持ちが少しずつ消え、溜ったストレスが原因で何でもないちょっとしたことからいざこざや言い争いが起きたりするようになった。

避難所内でも、ダンボールや布団などを使って簡易間仕切りをつくって少しでもプライバシーを守ろうとする住民が増えた。また、避難民のストレス解消にと、朝のラジオ体操を始めた学校もあった。

こうした中で、2月1日、国際見本市会場のインテックス大阪に、6畳の広さで170区画に間仕切りがしてある“プライバシー付き”の臨時宿泊所も登場した。

4週間目/ようやく畳で眠れる!

「当たったあ！」。

被災から3週間目の2月7日朝、神戸市が行った第一次仮設住宅入居当選者の発表ボードに中年の女性が泣いてすがりついた。わずか2701戸の第一次当選分をめぐって明暗が分かれた。

「ようやく畳の上で寝られて、自分で炊いたあったかいご飯が食べられます」と、喜びいっぱいの主婦もいれば、「家は壊れてしまてもうあらへんし、頼る身よりもないし、これからどうしたらええか……」と、がっくり肩を落とす70代の男性もいた。

神戸市の仮設住宅の一部入居が始まった被災後約1カ月目の2月15日、「これでやっとコート脱いで暮らせますわ」と、ささやかながらも“わが家”の鍵を手にして笑う人々の一方で、避難所で暮らす人々の数は依然として21万人だった。